

# トルクメニスタンの積極的中立外交 ——リージョナル・ハブとして台頭なるか——



加藤 学

国際協力銀行 モスクワ駐在員事務所  
首席駐在員

世界第4位の天然ガス埋蔵量を誇るトルクメニスタン。旧ソ連的な体質が残る対外発信に乏しい独裁国家のイメージがつきまとうが、近年、豊富なガス資源の多角的活用を促すエネルギー下流プロジェクトの推進に加え、鉄道、パイプライン、電力といったインフラ開発を通じて近隣諸国とのインターコネクション構築にも積極的に取り組んでいる。その横顔を本稿ではレポートする。

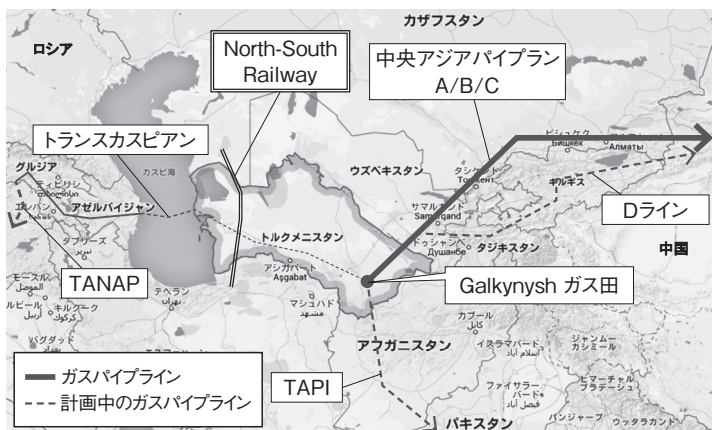
らアフガニスタン（Andkhoy）を經由してタジキスタン（Pyandzh）に至る鉄道建設をもくろむ。この南北鉄道回廊は、中央アジア地域における物流隘路の解消、ならびにロシア＝南アジア間のアクセス改善に道を開き、トルクメニスタンの位置付けを地域貿易上のゲートウェイに押し上げる可能性がある。また、中央アジアを越えてEUを目指す中国の陸上シルクロード構想にも呼応するものだ。

## 南北鉄道回廊

昨年12月2日、トルクメニスタン・ベルディムハメドフ大統領、カザフスタン・ナザルバエフ大統領、イラン・ロウハニ大統領ら列席のもと、カザフスタン（Uzen）からトルクメニスタンを縦断しイラン（Gorgon）に至る南北鉄道（North-South Railway）の開通式が、トルクメニスタン＝イラン国境付近にて盛大に挙行された。中央アジア方面からベルシャ湾までの既存輸送ルート大幅に短縮する南北鉄道は、カザフスタンから石油製品、穀物などをイラン向けに輸送する。この鉄道インフラは、2007年にトルクメニスタン大統領に就任したベルディムハメドフ氏の発案によるもので、同大統領は、さらにトルクメニスタン（Atamurat）か

## TAPI

上述の南北鉄道の開通を讃えるかたわら、ナザルバエフ大統領は、TAPI（トルクメニスタン＝アフガニスタン＝パキスタン＝インド）ガスパイプライン建設プロジェクトへの参画を表明。TAPIは、中国に偏重しつつあるトルクメニスタンのガス輸出販路を南方に切り開くものである。通過国の不安定性などの高いハードルが存在するが、いずれかの資源メジャー（Total、Chevronが関心表明）がコンソーシアム・リーダーとなりプロジェクトをリードすればさらに現実味を帯びてくる可能性がある。ナザルバエフ大統領は、詳しい参画プランを明らかにしていないが、ガス販路がロシアに限られ、またウクライナ紛争を踏まえロシアとの距離を慎重に推し量る必要が生じるなか、自国でのガス上流開発を進め、これをTAPIに送ガスするオプションも視野に入れていることは間違いない。



## トランスカスピアン

トルクメニスタンに秋波を送るのは、カザフスタンにとどまらない。今年1月29日、トルクメニスタンの首都アシガバッドにて、同国、トルコ、アゼルバイジャン3カ国外相が会談し、トルコとアゼルバイジャン両国は、トルクメニスタンに対し、カスピ海の海底を横断するトランスカスピアン・ガスパイプラインを新設し、

トルクメニスタンを縦断する南北鉄道および同国を巡るガス・パイプライン網  
(出所：Gas Matters等から筆者作成)

年内にも建設着工が見込まれるトルコ国内ガスパイプラインTANAP (Trans Anatolia Natural Gas Pipeline) と接続する構想を働きかけた。EUは、ロシアへのガス依存度を低下させるため、カスピ海周辺地域のガスをTANAPなどを通じてロシアを迂回し欧州に輸出する南エネルギー回廊構想を推進しているが、アゼルバイジャン (シャハ・デニズ海洋鉞区第二フェーズ) だけではガス供給源が十分といえないため、トルクメニスタンに熱い視線を寄せる。もっとも、未解決のカスピ海の法的地位 (「海」or「湖」の論争)・領海画定問題を理由にロシアの反対が見込まれるため、トランスカスピアンへの帰趨は不透明である。

## Dライン

他方、中国に至る東方へのガス輸出ルートは盤石といえる。中国はガス輸入の約5割をトルクメニスタンから調達しており (2013年実績244億 $m^3$ : BP統計)、トルクメニスタン政府は、22年までに中国向けガス輸送量を650億 $m^3$ /年に拡大する計画を今年2月に発表。これを支える主なガス供給源は、トルクメニスタンの巨大ガス田Galkynysh (埋蔵量2兆2000億 $m^3$ は世界第2位)、輸出ルートは、中国石油天然気集团公司 (CNPC) が建設したウズベキスタン=カザフスタンを經由し中国に至るA/B/C中央アジアガスパイプライン (合計輸送能力550億 $m^3$ ) である。この既存ルートに加え、昨年9月よりCNPCは、タジキスタン=キルギスを經由して中国に通じるDガスパイプライン建設 (輸送能力300億 $m^3$ ) に着工した。17年完工予定のDラインも合わせれば、そのガス輸送能力は合計850億 $m^3$ と膨大なものとなる。Dラインの完工によりトルクメニスタンは十分な中国向け送ガスインフラを獲得する一方、中国は、A/B/Cラインと異なり、タジキスタン=キ



アシガバッド駅を通過する幹線鉄道。トルクメニスタンを縦断する南北鉄道へ接続される (筆者撮影)

ルギスを経由国とするパイプラインを建設することで、ガス輸入ルートを多様化させるとともに、長年ロシアが「裏庭」と捉えてきた地域に通行料を落とすことで実質的な影響力を行使することが可能となる。ウクライナ紛争に伴い欧米との関係が決定的に悪化するなか、ロシアのベクトルもアジア、とりわけ中国に向かっており、中国があからさまな政治的な野心を「裏庭」に展開しない限り、ロシアは黙認するしかない状況だ。

## 電力輸出

ガスの有効活用は、電力輸出にも向かう。近年、トルクメニスタンは、アフガニスタンと300MWの電力供給にかかるPPA (Power Purchase Agreement) 締結に向けた協議を重ねている。廉価なガスを燃料とするトルクメニスタンの電力をアフガニスタンに輸出することを想定しており、同国復興支援としても位置付けられ、すでに国境に至る送電線や国境付近の変電所建設が進捗している。また、ADB・世銀が支援するTUTAP (トルクメニスタン=ウズベキスタン=タジキスタン=アフガニスタン=パキスタン) 送電線網構築プロジェクトとの連携も期待されている。

## ポジティブ・ニュートラリティ (積極的中立政策)

永世中立国ステイタス (1995年国連総会にて承認) のもと、トルクメニスタンの外交方針である「ポジティブ・ニュートラリティ (積極的中立政策)」の本質は、不安定性を有する周辺国とも善隣関係を維持し、地政学的なうねりの中で生じる中国、ロシア、米国といった大国の心理も巧みに利用しつつ、リージョナル・ハブとしての位置取りを狙う巧みな戦略といえる。「中立のガス」を梃子として、東西南北に延伸するパイプライン構築に取り組むその行動は、謎めいた対外イメージとは裏腹にきわめて明快だ。

トルクメニスタンは一日に一千里を走る汗血馬の子孫と言われる名馬アハルテケの産地である。輸送インフラを駆使し、ガス等の戦略資源・物資をあたかも汗血馬のごとく縦横に疾走させることができるか、今後の動向に注目したい。 (記2月末日)

\* 著者略歴：1996年日本輸出入銀行入行、2001～05年国際協力銀行モスクワ駐在員、13年6月から現職。慶應義塾大学法学部卒、ロンドン大学 (SOAS) 修士。